Rikkyo Clinical Psychology Research
2019, Vol. 13, 15-24

原　著

心理臨床家の経験知に基づくラポールの定義について[1]

SSJ株式会社　小川　瑛[2]

Definition of Rapport Based on the Empirical Knowledge of Clinical Psychologists

Akira Ogawa (SSJ Co., Ltd.)

The formation of rapport between psychotherapists and clients is considered to be important. However, a consensus definition of rapport in clinical psychology has not been established. Therefore, the purpose of this study was to develop a definition of rapport in clinical psychology. To accomplish this goal, a semi-structured interview about eight possible elements of rapport building was conducted with eleven clinical psychologists actively engaged in counseling. The eight elements consisted of “the client’s favorable impression of the psychologist,” “exchange of emotions between the psychologist and client,” “sharing of emotions between the psychologist and client,” “stability of the psychologist-client relationship,” “trust,” “smooth conversation,” “relaxed atmosphere,” and “natural flow of the session.” The results of analyzing the interview data suggested that rapport should be defined as “the state that allows/encourages the formation of cooperation relations on basic trust” and “safe and stable relations that provide a feeling of security and flexible strength,” which was supported by psychologists’ expertise. The results also revealed that clinical psychologists’ expertise plays an important role in building trust between psychologists and clients.

Key words : rapport, definition, clinical psychology

問題

臨床心理学において，カウンセリング関係を理論化する基礎を築いたRogers(1940)によると，カウンセリングの初期段階としてラポールが確立されるという。Rogers(1940)はラポールは暖かい関係として表現され，カウンセラーのカウンセリーに対する純粋な関心あるいはある程度の同一化の上に成り立ち，またその状態はカウンセラーによって理解され，ある程度はコントロールされるものであるとしている。またカウンセラーのこれらの態度はカウンセリーに確信と信頼を与えるという。心理臨床家のよって立つ理論や訓練の背景によって，カウンセリングの技法は様々であるが，いずれの技法であっても，心理臨床家がカウンセリングをする上で，ラポールの形成が必要であるという認識は共有されていると考えられる。

しかし，斯波・佐野(2002)によると，ラポールの概念を定める際にどこまでをラポールと考えるかという範囲の問題，ラポールという言葉が臨床技法別に個別に解釈されて利用されてきたという背景の問題，歴史的にラポールの語義すら変遷しているという問題があり，普遍的なラポールの定義がないという問題があるという。この普遍的なラポールの定義の不在によって，カウンセリングにおける前提としての知識が，心理臨床家間で共有されていないと考えられる。したがって，ラポールの定義を明確にすることにより，カウンセリングの導入期に心理臨床家が治療関係を築くために留意すべきことを明確にすることができるだろう。

斯波・佐野(2002)は，ラポールの概念・語義が記されている辞典から，その共通性に着目し，実際の臨床場面に即した，学派に捉われない広義の定義として，ラポールの語義を暫定的に「心理療

法場面の初期に形成され，全過程を通して存在し続ける，相互的・共感的・受容的な関係性のことであり，面接を継続し，クライアント(以下CLとする)が防衛を解いて話したり自己の内面を見つめることができるようになるために必要な関係性である。」としている（斯波・佐野, 2002, p.60）。しかし，この定義はあくまでも暫定的なものである。

赤田(2006)は，斯波・佐野(2002)の定義を踏まえ，遊戯療法を行っている学生を含む治療者45名に対して質問紙調査を行い，その結果をまとめて遊戯療法におけるラポールを「CLがセラピストに好感を持ち，暖かい感情の交流がスムーズに行われていく状態で，感情の分かち合いが出来る関係であり，また，容易に壊れることなく安定し，お互いの信頼が生じている関係である。」と定義した（赤田, 2006, p.69）。しかし，これは遊戯療法に限定したラポールの定義であり，成人を対象としたカウンセリングにおけるラポールの定義として通用するかどうかについては検討されていない。また赤田(2006)は学生を調査対象に含んでいるため，心理臨床家としては未熟な人のラポール観が入っているという限界がある。従って，心理臨床家としての経験に裏付けられた，成人を対象とするラポールの定義はまだなされていない。

そこで，本研究においては，心理臨床家の経験知に基づき，成人を対象としたカウンセリングにおけるラポールを定義することを目的とする。そのために，先行研究に基づいて，臨床経験が5年以上の心理臨床家にラポールについての面接を行ない，これを質的研究方法によりまとめて，ラポールの再定義を試みる。

分析はKJ法(難波, 2005)を援用して質的に分析し，その結果を踏まえて，ラポールを定義することが本研究の目的である。

方法

研究協力者　継続的なカウンセリングを行っている臨床心理士11名を対象として面接を行った。臨床経験が5年以上で，所属学派が偏らないように多様な学派の臨床心理士に依頼した。協力者は11名（男性4名と女性7名）の臨床心理士で，年齢は聞かなかった(Table 1)。

Table 1　協力者の属性

	性別	臨床理論
1	女性	統合（精神分析・家族療法・来談者中心療法）
2	女性	精神分析的心理療法
3	女性	精神分析的心理療法（対象関係論）
4	女性	来談者中心療法
5	女性	精神分析的心理療法（ユング・精神分析）
6	男性	統合（来談者中心療法中心）
7	男性	行動療法（応用行動分析スキナー派）
8	女性	精神分析的心理療法（対象関係論）
9	男性	認知行動療法
10	男性	来談者中心療法・フォーカシング
11	女性	認知行動療法

調査場所　他人に話の内容を聞かれたり邪魔されたりしない場所で実施した。具体的には，会議室，大学の面接室，相談施設の個室などを用いた。

調査期日　面接は，2017年4月12日～6月2日の期間であった。

倫理的配慮　研究参加者に研究への参加は自由意志によるものであり，面接中に気分が悪くなるなど，参加を中止したくなった場合は直ちに面接を中止できること，面接後に研究参加を中止したくなった場合にも中止できることを説明した。また研究参加を中止する場合はそれまでに収集されたデータを全て責任をもって破棄することを説明した。以上の説明を書面と口頭にて行った。面接は研究参加者の許可を得た上で録音し，録音機器および録音データが入ったリムーバル・ディスクは，鍵のかかるロッカーに保管した。文書化した記録には固有名詞は記載せず，全て記号化した。固有名詞と記号との対照表は手書きで作成し，研究者が責任をもって鍵をかけたロッカーに保管し，全ての電子媒体にはパスワードを設定し，個人情報の漏洩を防いだ。面接時に研究の手続きや人権擁護などについて文書と口頭で説明を行い，その説明を理解した上で研究協力の同意が得られた場合には同意書に署名を求め，あらかじめ同意書の

コピーを用意し，同意が得られた協力者にコピーを渡した。本研究は，立教大学倫理審査委員会の承認を受けて実施された(承認番号：16–61)。

面接手続き　研究協力者との面接は，面接の概要，目的，方法，倫理的配慮，質問事項を記載した事前説明書類を郵送した上で実施された。面接時間は約30分～60分であった。ラポールの定義と，ラポールが形成された面接場面について半構造化面接を行った。

面接内容　遊戯療法のラポールを要素に分けた上で研究協力者に質問を行った。

すなわち，赤田(2006)のラポールの定義，そして赤田(2006)がラポールの定義を作成する上で使用した6尺度のうち，2尺度の質問項目である(a) CLがセラピストに好感を持つ，(b)二人の場に暖かい感情の交流がある，(c)表面的でなく深いレベルで共通の感情の分かち合いがある，(d)二人の関係が安定している，(e)お互いの会話のスムーズなやり取りがある，(f)お互いの信頼を感じる，(g)なんでも話が出来そうな雰囲気，(h)自然に時間が流れる，の8つは成人のラポールにも共通する要素として妥当であることを30年の臨床経験を持つ心理臨床家に確認した上，採用した。8つの要素を，「CLからの感情」，「感情の交流」，「感情の分かち合い」，〈関係の安定性〉，「信頼」，「会話」，「雰囲気」，「時間」と仮に名付けた。

質問項目は以下の通りだった(Table 2)。

Table 2　質問項目

① 先の操作的ラポールの定義と要素について，一つ一つについて先生のお考えをお聞きします。それぞれの項目について自由にお話しください。ラポールが形成された状態では・・・

(ア)クライアントがセラピストに好感を持つ。
(イ)暖かい感情の交流がスムーズに行われていく。
(ウ)感情の分かち合いができる関係である。
(エ)容易に壊れることなく，安定している関係である。
(オ)お互いの信頼が生じている関係である。
(カ)お互いの会話のスムーズなやり取りがある。
(キ)なんでも話が出来そうな雰囲気がある。
(ク)自然に時間が流れる。

② 今までにお話しいただいた以外で，先生がお考えになるラポールについての定義に含むべきだと思われるものは何かありますでしょうか。あれば自由にお話しください。

分析方法　面接調査から得られたデータをもとに，逐語録を作成した。逐語録から抽出した内容を，KJ法(難波, 2005)を援用して分析した。

本研究では，「KJ法の4ステップ・1ラウンド」を用いた(難波, 2005)。

最初に，逐語録の内容を細分化してラベルと呼ばれる一枚の紙切れに一つの事柄を記入し，複数のラベルを作成した。次に，ラベルを内容の似ているもので集め，まず小カテゴリ，次に中カテゴリ，さらに大カテゴリにまとめ，「表札」と呼ばれる本質を的確に表現する表題を記入した。そして，カテゴリ毎の意味を考え，他のカテゴリとの関連性を考えながら配置を検討し図解化した。

KJ図における表示は，以下の通りだった。ラベ

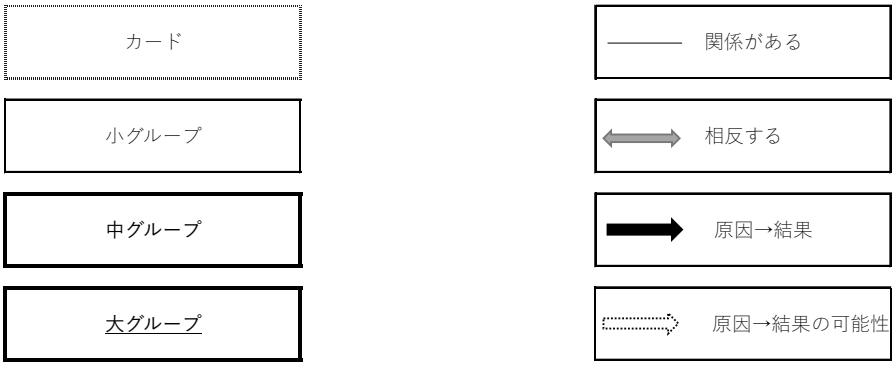

Figure 1.　KJ図内各項目記号

ルは点線囲み，小カテゴリは実線囲み，中カテゴリは太実線囲み，大カテゴリは灰色太実線囲み，関係がある状態は実線，相反する状態は灰色左右矢印，原因と結果は黒矢印，原因と結果がある可能性は白矢印で示した(Figure 1)。

結果

録音された面接を逐語記録におこし，その結果からラポールに関すると思われる文を抜き出した。具体的には，ラポール形成状態，ラポールではないもの，ラポール形成状態の肯定的な面，ラポール形成状態の肯定的にならない条件，ラポール形成状態の条件について書かれた文をすべて抜き出した。抜き出した文は，303文であった。この303文を5名の臨床心理学を専攻する大学院生の分析者によるカテゴリKJ法(難波, 2005)によって，小カテゴリ化，中カテゴリ化，大カテゴリ化を行い(Table 3)，それぞれのカテゴリの関係を図として作成した(Figure 2)。自身の臨床経験やラポールについての考え方が未だ固まっていないために，自身のラポール観にひきよせることなく，分析ができる一方で，ラポールが生じる関係性について一定の知識を持つ臨床心理学を学んでいる大学院生複数名による分析を行った。

大カテゴリは5つあり，それぞれ【TH（セラピ

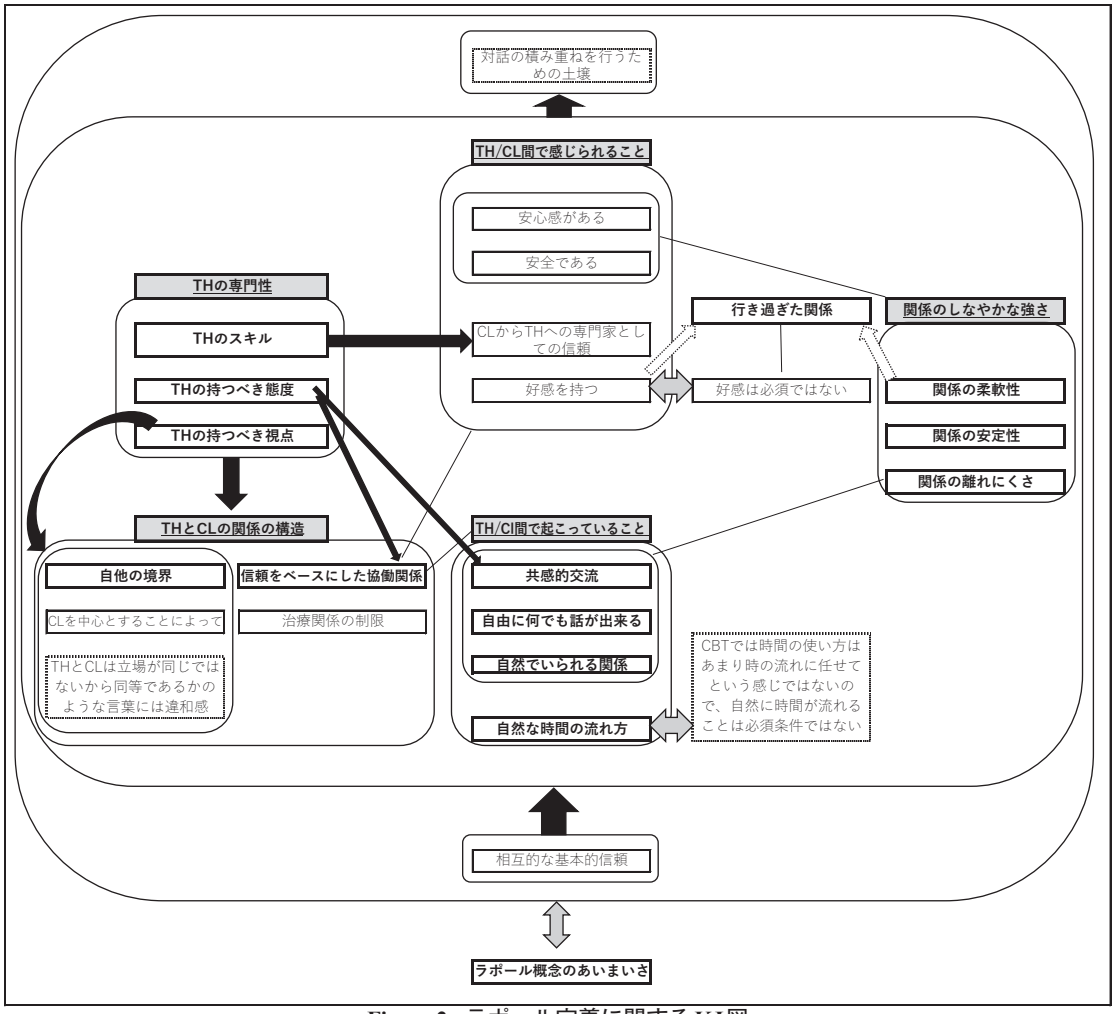

Figure 2. ラポール定義に関するKJ図

Table 3 ラポールに関するカテゴリ(大カテゴリ・中カテゴリ・小カテゴリ)

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ
Thの専門性	Thのスキル	Thの見立て
		場を提供するのに必要なThのスキル
	Thの持つべき態度	ClからThへの専門性への信頼
		ThからClへの配慮
		ThがClに持つ成長力への信頼
		ThがClに持つ成長力への信頼に持つ人間性に対する信頼
	Thの持つべき視点	Thの第3の目
		Thは警戒を持つ必要がある
関係のしなやかな強さ	関係の柔軟性	関係が変化していく
		ThとClのズレは生じる
	関係の安定性	安定
		継続していく
		治療が続くことへの信頼
	関係の壊れにくさ	復元力
		Thがネガティブなことを言っても大丈夫
		Thの失敗をClが容認できる
		Clがネガティブなことを言える、持ち堪えられる
Th/Cl間で感じられていること	(中カテゴリなし)	安心感がある
		安全である
		ClからThへの専門家への信頼
		好感を持つ
ThとClの関係の構造	自他の境界	ThとCl間のセパレーティッドネス
		依存的ではない
	信頼をベースにした協働関係	協働関係
		協働が出来ることへの信頼
		Clを中心とすることによって(小カテゴリのみ)
		治療関係の制限(小カテゴリのみ)
Th/Cl間で起こっていること	共感的交流	会話のモードが合う
		一体感
		感情のシェアリング
		暖かい感情の交流がある
		暖かい感情は別にいらない
	自由に何でも話が出来る	何でも話ができる
		時間を超越する
		スムーズな会話はいらない
		ぎこちなくない会話のやり取り
		Clの話の選択の自由
	自然でいられる関係	「〜ねばならない」はない
		気を使わない
		黙っていても大丈夫
		あるがままが許される
	自然な時間の流れ方	自然に時間が流れる
		退屈を感じたらラポールではない
	行き過ぎた関係(中カテゴリのみ)	怪しい関係
	ラポール概念のあいまいさ(中カテゴリのみ)	ラポールは人それぞれ
		ラポールとは何か分からない
		不確かな感覚
		好感は必須ではない(小カテゴリのみ)
		相互的な基本的信頼(小カテゴリのみ)

スト）の専門性】，【THとCLの関係の構造】，【TH/CL間で感じられること】，【TH/CL間で起こっていること】，【関係のしなやかな強さ】とラベルをつけた。

【THの専門性】には，3つの中カテゴリが含まれ，〈THのスキル〉，〈THの持つべき態度〉，〈THの持つべき視点〉と名付けた。それぞれのカテゴリに含まれる語りとしては，「受容的であること，共感的であること」，「ある程度の見立てを立てて関わらなくてはならない」，「相手のニーズを把握しなければならない」などが得られた。

【THとCLの関係の構造】には，2つの中カテゴリ，2つの小カテゴリ，原文が1つ含まれ，それぞれ〈自他の境界〉，〈信頼をベースにした協働関係〉，〔CLを中心とすることによって〕，〔治療関係の制限〕，「THとCLは立場が同じではないから同等であるかのような言葉には違和感」とした。中カテゴリと小カテゴリに含まれる原文としては，「CLが存在することによってTHが活かされているっていう感覚」や「問題に対して二人が協働で，あるいは共に，協力してこの問題に，共に対処するという三角関係」などが挙げられた。

【TH/CL間で感じられること】には，4つの小カテゴリが含まれ，それぞれ〔安心感がある〕，〔安全である〕，〔CLからTHへの専門家としての信頼〕，〔好感を持つ〕とラベルをつけた。これらカテゴリに含まれる原文としては，「CLがTHに対して安全な感じを持って，ここで何でも話せると思うこと」や「安心して話しても良いなって思ってくれるというような雰囲気」などがあった。

【TH/CL間で起こっていること】には，4つの中カテゴリが含まれ，それぞれ〈共感的交流〉，〈自由に何でも話が出来る〉，〈自然でいられる関係〉，〈自然な時間の流れ方〉と名付けた。語りとしては，「CLはTHの広げた場に何でも置いて行って良い」，「一緒にいる時間を味わえる」，「気兼ねなくものが言える」などが挙げられた。

【関係のしなやかな強さ】には，3つの中カテゴリが含まれ〈関係の柔軟性〉，〈関係の安定性〉，〈関係の壊れにくさ〉と名付けた。これらカテゴリの語りとしては，「カウンセリングに対して不満が言えるとか，注文がつけられる」，「CLのその非常にプライベートな話についても，THが遠慮しながらも慎重になりながらも，でも取り上げるっていうチャレンジができるかどうか」，「ラポールが形成された状態は継続していく」などがあった。

これらの大カテゴリ以外に，2つの中カテゴリ，2つの小カテゴリ，原文2つが存在し，それぞれ〈行き過ぎた関係〉，〈ラポール概念のあいまいさ〉，〔好感は必須ではない〕，〔相互的な基本的信頼〕，「CBTでは時間の使い方はあまり時の流れに任せてという感じではないので，自然に時間が流れることは必須条件ではない」，「対話の積み重ねを行うための土壌」とラベル付けした。

Figure 2の【THの専門性】は，【THとCLの関係の構造】の原因となっていると認識されていること，また【THの専門性】に含まれる〈THのスキル〉は〔CLからTHへの専門家としての信頼〕の原因となっていると認識されていることが明らかになった。

〈THの持つべき態度〉も，〈共感的交流〉，〈自由に何でも話が出来る〉，〈自然でいられる関係〉，〈信頼をベースにした協働関係〉の原因として認識されていた。そして〈THの持つべき視点〉は，〈自他の境界〉，〔CLを中心とすることによって〕，「THとCLは立場が同じではないから同等であるかのような言葉には違和感」の原因として認識されていた。

【THとCLの関係の構造】に含まれる〈信頼をベースにした協働関係〉は，【TH/CL間で感じられること】と【TH/CL間で起こっていること】の2つに大カテゴリと関係がみられた。更に【TH/CL間で感じられること】に含まれる〔安心感がある〕と〔安全である〕は，【関係のしなやかな強さ】と関係がみられた。〔CLからTHへの専門家としての信頼〕は，【THとCLの関係の構造】の原因として認識されていた。THがCLに，またはCLがTHに「好感を持つ」は，〈行き過ぎた関係〉に至る可能性が示され，同時に〔好感は必須ではない〕という小カテゴリと相反する関係にあると考えられた。

【TH/CL間で起こっていること】に含まれる〈共感的交流〉,〈自由に何でも話が出来る〉,〈自然でいられる関係〉は,〈関係の壊れにくさ〉と関係がみられた。〈自然な時間の流れ方〉については,「CBTでは時間の使い方はあまり時の流れに任せてという感じではないので,自然に時間が流れることは必須条件ではない」というコメントがあり,原文と相反する関係がみられた。

【関係のしなやかな強さ】に含まれる〈関係の柔軟性〉は,〔好感を持つ〕と同様に〈行き過ぎた関係〉に関係がみられた。

より大きな視点として,〔相互的な基本的信頼〕が上記のすべての要素の土台となり,さらに,「対話の積み重ねを行うための土壌」となることが示された。一方,このようなラポールの要素の間の構造と矛盾するものとして,〈ラポール概念のあいまいさ〉という中カテゴリの見解もみられた。

上記の結果を総合した結果,本研究では,臨床心理士がカウンセリングにおいて形成するラポールを,「ラポールとは,THがCLとの自他の境界という視点及び,共感的な交流・自由に話ができる関係・自然でいられる関係を作る態度,という専門的なスキルにより,CLとTHとの基本的信頼がある協働関係を形成した状態であり,安心感があり,安全で,しなやかな強さのある,安定した関係である」と定義した。

考察

ラポールが形成された状態

本研究の結果から,ラポールが形成された状態とは,THの専門性を背景に,THはCLとの間に「基本的信頼がある協働関係を形成した状態」,「安心感があり,安全で,しなやかな強さのある,安定した関係」を構築した状態であるとした。斯波・佐野(2002)による暫定的な定義や赤田(2006)の定義との間の共通の要素として,相互性・共感的・受容的な要素がみられた。

一方,斯波・佐野(2002)の定義に含まれる「初期」という時期は本研究においては特に言及されなかった。Rogers(1940)は,成功した治療では,ラポールは面接が終わるまで続くものだと語っている。ラポール形成について面接を行ったが,面接を受けた心理臨床家の中に,ラポール形成が初期のできごとに限らず,継続するものである可能性についての認識が共有されていたかは不明である。この点について確認していないことが本研究の限界の1つである。

次に赤田(2006)がラポールの要素とした「CLがTHに好感を持つ」,「暖かい感情の交流がスムーズに行われる」状態に関して,好感の度合い,スムーズという表現への理解について研究協力者により,次のように意見が異なっていた。好感に関しては,「当たり前のように相手への好感を持つ」と述べた協力者と,「ラポール形成のために必要ではない」と述べた協力者があり,心理臨床のオリエンテーションや個人により,ラポールの要素として好感を含む人と含まない人がいた。従って,本研究の定義からはこの要素は除外した。

斯波・佐野(2002)の定義に含まれなかったが,赤田(2006)の定義に含まれ,協力者語りの中で多くみられた要素は,「信頼」であった。したがって,本研究では,面接の中で語られた基本的信頼をラポールが形成された状態の構成要素の一つとして考えた。Erikson (1959 小此木訳 1973)によれば,基本的信頼感(sense of basic trust)は,生後1年の経験から獲得される自己自身と世界に対する一つの態度であり,他人に関しては筋の通った信頼(reasonable trustfulness)を意味し,自分自身に関しては信頼に値する(trustworthiness)という単純な感覚を意味する。この基本的信頼がTHとCLの間に生まれることで,「安心感」があり,「安全」な関係が築かれると考えられる。一方で,協働関係というCLの心理的課題や心理的問題を客観的に置いた三角関係,その関係を保ち続けられるしなやかな強さ,安定性は,基本的信頼のみで十分に説明できないものであり,そこにTHの専門性が関係していると考えられる。

「信頼」が生まれる過程についてはRogers(1940)がセラピィの初期段階において次のように説明し

ている。「カウンセリングの初期段階にラポールが確立され，THからCLに対する純粋な関心あるいはある程度の同一化がある。この状態がTHによって理解され，コントロールされることで，均衡のとれた同一化と客観性のある状態に至り，このTHの態度によってCLに確信と信頼感を与えることができる」（Rogers, 1940, p.162）。このRogers(1940)の言葉の中で，THがCLに対する純粋な関心とある程度の同一化を「理解」し，「コントロールする」という行為は，「均衡のとれた同一化と客観性」をもたらし，「CLに確信と信頼感を与える」という目的を持った行為であり，素朴に自然に生じるものではない。THの専門性を持った行為であると考えられる。これは「THの専門性によってCLに信頼が生じる」という本研究におけるTHのラポールの定義の一部を支持すると考えられる。

ラポール形成におけるTHの専門性

本研究の結果から，従来のラポールの定義に加えて臨床心理士の専門性がラポールを形成する重要な要因の一つとして臨床家に認識されていることが明らかになった。そして，THの専門性には，THのスキル，態度，視点が含まれていた(Figure 2)。CLからTHへの信頼を形成し，信頼がある関係の構造を作るのは，THのスキル，という専門性であると認識されていた。CLとの信頼をベースにした協同関係を構築するのは，CLの人間性への信頼，CLへの成長力への信頼というTHの態度，という専門性であると認識されていた。さらに，共感的な交流，自由に話ができる関係，自然でいられる関係を作るのも，CLへの配慮というTHの専門性であると認識されていた。THとCLの関係の構造を俯瞰して見ることで，曖昧になりやすいTHとCLの境界を常に意識し関係性がどのような状態にあるかを観察し見立てることは，THの視点という専門性であると認識されていた。以上のように，THの専門性がTHとCLの関係の構造の決定要因として語られた。

しかし，本研究はTHとCL関係における相互作用におけるラポールの定義を作成することを目的としたため，大カテゴリにおける【THの専門性】をより詳細にとらえることができなかったという限界がある。そこで，専門性についての先行研究を参照したい。THの専門性について，浅原・橋本・高梨・渡邉(2016)が25年以上の臨床経験を有する熟練の臨床心理士21名の語りによる質的研究を行った。これによると，THの専門性は，A.実践の対象・目的，B.実践の内容，C.実践に臨む姿勢，D.実践に求められる専門的資質，E.実践の支え，F.心理臨床の特質の6領域に集約されるという(Figure 3)。また浅原らは，それら6領域の中で

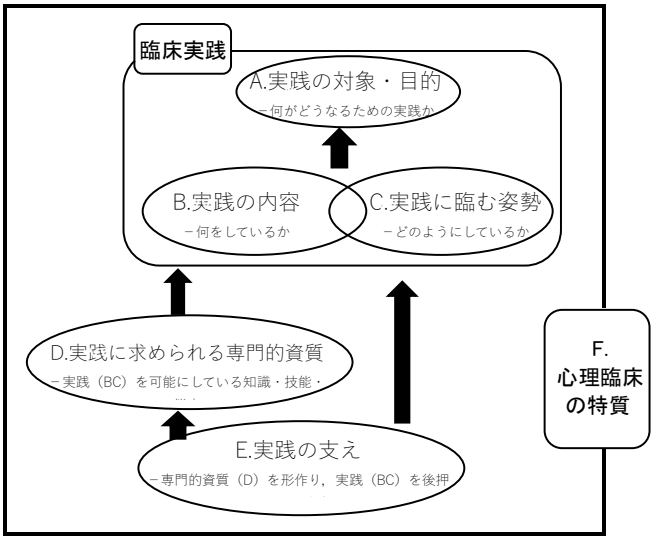

Figure 3. 専門性の諸側面とその関係(浅原他, 2016)

専門性の中核的特徴について，専門性の中心は，C.実践に臨む姿勢にあり，その中核的要素は，自らが臨床的にかかわる対象の主体性を最大限尊重しようとする姿勢である，という仮説的見解を呈示している。

浅原他（2016）の研究と本研究の結果を比較すると，いくつかの該当する要素がみられた。すなわち，本研究で示されたTHの専門性である〈THのスキル〉はB.臨床実践の内容やD.臨床実践に求められる専門的資質に該当すると考えられる。また「THの態度」はA.実践の対象・目的，B.実践の内容，C.実践に臨む姿勢，D.実践に求められる専門的資質に該当すると考えられる。更に「THの視点」は，C.実践に臨む姿勢，D.実践に求められる専門的資質に該当すると考えられる

また，本研究のラポールの定義に含まれる，「CLとの自他の境界という視点及び，共感的な交流・自由に話ができる関係・自然でいられる関係を作る態度，という専門的なスキル」は，関係を俯瞰的に観察することによってはじめて自他の境界の視点を持てること，一方で共感的な交流や事由に話をすることは，深く関係に関与することなしには生じないことから，Sullivan(1947 中井・山口訳1976)がTHとCLの関係について述べた「関与しながらの観察(participant observation)」にも該当するといえよう。

以上のように，本研究において抽出されたラポールの定義の中の「専門性」が先行研究の知見に該当すると考えられることは，その妥当性を部分的に支持していると考えられる。今後，ラポールの形成におけるTHの専門性に焦点をあてて検討することが課題である。

このTHの専門性が心理臨床におけるラポールに必要であるという点は，斯波・佐野(2002)や赤田(2006)の研究にはなかった新たな視点であると言えよう。

ラポールと治療同盟

本研究のラポールに類似の概念として，治療同盟やTHとCLとの共同作業があると考えられる。東山（編）(2005)によると，「治療同盟(Therapeutic alliance)とは，TH/CL関係の中で，セラピー(治療)という共通目的のために両者が手を組んでいる部分を示す構成概念である」としている。治療同盟研究においても，治療者の専門的な視点が重要であることがO'Malley, Suh, & Strupp(1983)により示されている。すなわち，治療同盟を測定する尺度を用いた研究の結果，「患者の関与度」と「治療者が提供する関係」と治療効果は相関関係があり，治療中に「患者の関与度」が高く「治療者が提供する関係」が良いほど，後の治療効果が高いことを予測した。研究では，治療同盟の測定は，患者と治療者と両方で行われたが，治療効果を予測したのは，患者による評定ではなく，治療者による評定であった。またその追試として，成人の外来患者に対象を広げ，治療者数も増やして研究したWindholz & Silberschatz(1988)の研究でも全く同じ結果が得られた。

すなわち，治療者の専門性の重要性は，治療同盟とラポールに共通しているが，本研究におけるラポールの概念は，治療同盟の定義を超えて，セラピープロセスの全体を通じて相互的に形成される「安心感があり，安全で，しなやかな強さのある，安定した関係」という質を記述している。ラポール概念はその豊かな含意が特徴であると言えよう。

本研究の意義

本研究では，心理臨床家の経験知に基づき，ラポールが形成された状態はTHの専門性の上で作られるものであることを明らかにした。これは，心理臨床家が治療関係を築くにあたり，十分な訓練を受け，一定の専門性を備えていることの必要性を明確にしたと考える。面接の場に基本的な信頼関係が築かれ，安心感，安全な状態が確立するためには，治療者の態度だけでは十分ではない。THがCLの心理的課題を見立て，その課題をCLと共有し，THとCLと心理的課題の三角関係を築くこと，その関係を保ち続けられるしなやかな強さ，安定性を持つためにも，専門性が必要なのである。すなわち，カウンセリングにおけるラポールは「平等な関係において形成される状態」では

なく，「THが心理臨床的な立場からCLを見るという専門性を伴う関係性」であるという知見を提起したことに本研究の意義がある。

本研究の限界として，ラポールというTH/CL関係のものをTH側からのみから検討しているという点が挙げられるだろう。この点については，本研究が心理臨床家の経験知を集約するという研究方法に因るところが大きい。今後，さらに多くの心理臨床家の経験知を集約し，CL側の要因を検討しつつ，THの専門性についてその内容を吟味することが本研究の課題である。

脚注

1. 平成29年度立教大学大学院現代心理学研究科臨床心理学専攻修士論文での発表に加筆修正したものである。
2. 立教大学在学中よりご指導頂いている林もも子先生，調査や分析にご協力頂いた先生方に心から感謝致します。また，本論文の作成を励まして下さった家族，友人，同期の方々に深く感謝致します。

引用文献

赤田 太郎(2006). 遊戯療法におけるラポールの構成因子の分析―ラポール測定尺度による治療者のラポール認知と心理臨床に基づくラポールの定義 龍谷大学教育学会紀要，***5***, 49-71.

浅原 知恵・橋本 貴裕・高梨 利恵子・渡邉美加(2016). 心理臨床家の専門性とは何か：熟練臨床家による語りの質的分析 心理臨床学研究，***34***(4), 377-389.

Erikson, E. H. (1995). *Identity and The life cycle*. New York: W. W. Norton & Company.
(エリクソン，E. H. 小此木啓吾（訳)(1973) 自我同一性 アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)

難波 淳子(2005). KJ法 伊藤哲司・能智正博・田中共子(編)動きながら識る，関わりながら考える―心理学における質的研究の実践(pp.125-131) ナカニシヤ出版

O'Malley, S., Suh, C., & Strupp, H. (1983). The Vanderbilt PsychoTherapy Process Scale: A report on The scale development and a process-outcome study. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, ***51***, 581-586.

Rogers, C. R. (1940). The processes of therapy. *Journal of consulting psychology*, ***4***, 161-164.

斯波 涼介・佐野 秀樹(2002). 『ラポール形成』に関する研究の展望 教育相談研究，***40***, 61-66.

東山 紘久(編)(2005). 治療同盟東山 紘久・氏原 寛・亀口 憲治・成田 善弘・山中 康弘(編)心理臨床大辞典(p.230) 倍風館

Sullivan, H. S. (1947). *Conceptions of modern psychiatry*. Oxford, England: William Alanson White Psychiatric F.
(サリヴァン，H. S. 中井 久夫・山口 隆（訳)(1976). 現代精神医学の概念 みすず書房)

Windholz, M. J., & Silberschatz, G. (1988). Vanderbilt PsychoTherapy Process Scale: A replication with adult outpatients. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, ***56***, 56-60.

2018. 5. 25 受稿，2018. 6. 15 受理